

博士論文（要約）

日本語連体修飾節と
ドイツ語関係節の対照研究

城本 春佳

第一章 序論

本論文は、日本語とドイツ語のいわゆる「関係節」（主名詞が修飾節述語の項またはその付加語として解釈可能な構文）を対象に、一方の言語では関係節で表現可能なものが他方の言語では表現できない（または完全に不可能ではなくとも非常に不自然になる）場合について、なぜ言語間でそのような差異が見られるのかについて検討し、両言語の当該構文の、構文的・意味的・談話機能的特徴を明らかにすることを目的とするものである。

日本語とドイツ語の、いわゆる「関係節¹」に相当する構文の典型例として、以下のよう
なものが挙げられる。

(1) 彼は[わたしが昨日見かけた]男だ。

(2) Er ist der Mann, [den ich gestern gesehen habe].

He is the man REL I yesterday seen have

例文(1),(2)はそれぞれ、主節「彼は男だ/ Er ist der Mann」の中の名詞「男/Mann」に、その指示対象を更に詳しく説明する「私が昨日見かけた/ den ich gestern gesehen habe」という修飾節が係っている構文である。また意味的には、被修飾語（以下「主名詞」）「男/Mann」は修飾節の述語「見かけた/gesehen」の項（ここでは直接目的語）として解釈される。

例文(1),(2)が示す通り、日本語とドイツ語の関係節構文²は、主名詞と関係節の位置関係や関係代名詞の有無など、互いに異なる文法的特徴を持つ。そこで第一章では、まず日本語の連体修飾節とドイツ語の関係節について、類型論的な観点からその構文的な相違点をまとめた。重要な相違点の一つ目は、日本語では修飾節は常に主名詞に前置されるのに対し、ドイツ語では修飾節は主名詞に後置される点である。これは、二章で述べる両言語の当該構文の持つ談話機能の相違につながるものである。二つ目は、ドイツ語では関係詞が主名詞と修飾節述語との意味関係を明示するのに対し、日本語では主名詞と修飾節述語との意味関係を明示する文法的な要素がない点である。それゆえ、日本語の連体修飾節構文では、主名詞が修飾節述語の項として解釈される「関係節」以外にも、主名詞と修飾節との間に様々な意味関係が成り立ち得る。本論では、主名詞と修飾節の意味関係から、日本語の連体修飾節構文を、①関係節、②内容節、③相対名詞修飾節、④語用論的修飾節、⑤主要部内在型関係節の五つに下位分類し、ドイツ語ではどのような構文がそれらに相当する意味関係を表すことができるか検討した。結果は、以下の図1のようにまとめられる。

¹ 関係代名詞が存在しないことなどから、日本語には「関係節」は存在しないということもできるが、ここでは、ドイツ語との対照研究を行う便宜上、主名詞を修飾節述語の項として解釈可能な連体修飾節を「関係節」と呼ぶこととする。また、ドイツ語については、*Relativsatz* の訳として「関係文」という用語が用いられることが一般的であるが、本論では日本語の「節」という用語に合わせて「関係節」と呼ぶことにする。

² 以下、原則的に主名詞に係る節を「関係節」、関係節と主節を合わせた文全体を「関係節構文」と呼ぶ。

日本語	①関係節	②内容節	③相対名詞修飾節		④語用論的 修飾節	⑤主要部内在 型関係節
			事柄・空間的相対性	時間的相対性		
ドイツ語	関係節	dass 同格 節	da-前置詞＋	副詞節	—	—
			dass 同格節			

図 1 日本語の各連体修飾節構文とドイツ語の構文との対応関係

第二章 談話機能に基づくドイツ語非制限的關係節の下位分類と日本語との対応

第二章では、ドイツ語では関係節構文で表現できる内容が、日本語では連体修飾節構文で表現することが難しい以下のような例を出発点に、ドイツ語の非制限的關係節の持つ談話機能について検討し、日本語の連体修飾節との対照を行った。

(3) Er suchte eine Telefonzelle, die er schließlich auch fand.

he looked-for a phone-booth REL he finally also found

(4) *彼はとうとう見つけた電話ボックスを探した。

ドイツ語の(3)のような関係節構文は「継続的關係節」と呼ばれ、「主節の内容を更に進める」または「注釈やメタテキスト的コメントを表す」とされている(Duden 2016, Helbig 1980 ら)。

Cinque(2008)では、多くのヨーロッパ言語において、非制限的關係節に異なる 2 つのタイプ、すなわち文法レベルで先行詞と結びつく「integrated タイプ」と、談話文法レベルで先行詞と結びつく「non-integrated タイプ」の対立が見られることが指摘されており、指示詞系の関係詞は integrated タイプに、疑問詞系の関係詞は non-integrated タイプに相当するとされている。しかしドイツ語の関係節構文では、指示詞系の関係詞も non-integrated タイプに相当する特徴を持つことができることから、関係詞による対立がそのまま当てはまるとは言えず、この「継続的關係節」とされてきたものが non-integrated タイプに、通常の非制限的關係節(＝同格的關係節)が integrated タイプに相当するものと考えられる。

また、これまでの継続的關係節に関する記述では、「主節の内容を先に進める」ものと、「注釈やメタテキスト的コメントを表す」ものという、二つの異なる談話機能を持つものがどちらも継続的關係節と見なされていた(Helbig 1980, Brandt 1990, Holler 2005 ら)。しかし本論では、ストーリーラインへの関与の仕方という談話機能の観点から、非制限的關係節を「同格的關係節」「継続的關係節」「挿入的關係節」の三つに分類することを提案した。以下の例文のうち、(5)が同格的關係節、(6)が継続的關係節、(7)が挿入的關係節に相当するものである。

(5) Uli, der am liebsten mit Matthias zusammen gewesen wäre, trat an Martin heran.

„Darf ich nicht mit euch kommen?“ (Kästner, 1933. Das fliegende Klassenzimmer)

‘できればマチアスといっしょにいたかったウリーは、マルチンのところに行くと、言いました。

「ぼくも、きみたちといっしょにいつちいけないかい」

(6) „Gehen wir doch wenigstens für einen Augenblick hinaus!“, forderte ich Garpe auf, der erfreut zustimmte. (Endo, 1969. Übersetzung von Linhart, 2015. Schweigen)

‘「少しだけ外に出ようか」私が誘うと、ガルペは嬉しそうに同意しました。’

(7) In unserer Gymnasialzeit, oder vielleicht nur in unserer Schule, kamen dabei Geschichte und Literatur schlecht weg, was durchaus nicht die Regel sein muß.

(Brandt 1990: 123)

‘私たちの高校時代、あるいはおそらく私たちの学校でのみ、歴史と文学はひどく遠ざけられた、それが全く通例である必要はないのだが。’

「同格的関係節」はストーリーラインに間接的に関与し、談話の理解を助ける従属的な情報を表す ((5)では、関係節が主節の表す事態の理由を表している) もので、統語的にも音韻的にも、より主節に対して従属的な特徴を持つ。「継続的关系節」はストーリーラインに直接的に関与し、談話を更に先に進めるものである ((6)では、主節が「私が誘った」こと、関係節が「ガルペがそれに同意した」ことを表している)。統語的にも、より主節から独立した等位接続相当の特徴を持つ。ただし、関係詞による先行詞指示と、動詞が後置されているという従属節の形式を持つことで、独立文の連続よりも談話の結束性を示すことができる。

「挿入的关系節」はストーリーラインを逸脱した注釈やコメントなどの情報単位をもつ。音韻的には節前後の休止や、表記的にはダッシュや括弧で前後の文脈からの逸脱が表される。また、対人的なモダリティ要素を含むことができ、ストーリーラインを逸脱して聞き手に直接働きかける機能を持っている。

本論では、日本語の連体修飾節が、この3つの談話機能を持ち得るかについても検討した。その結果、日本語の連体修飾節は「同格的関係節」に相当する談話機能しか持ち得ないことが示された。これはドイツ語関係節と日本語連体修飾節の構文的な相違を反映するものであると考えられる。ドイツ語関係節は主名詞に後接するだけでなく、主節の後ろに置かれ得るため、主節に後続する叙述内容を表すことができるが、日本語の連体修飾節は主名詞に前接していなければならない、修飾節述語は主節述語より前に置かれるため、主節に後続する叙述内容を表すことは難しい。また、ドイツ語関係節は関係詞の指示機能によって、ストーリーラインを逸脱しても談話の結束性を示すことができるが、日本語連体修飾節は関係詞を持たないためそれができない。更に日本語の連体修飾節は対人的なモダリティを含むことができず、ストーリーラインを逸脱して聞き手に直接働きかけることはできない。これらの事実から、ドイツ語の関係節の方が、日本語の連体修飾節よりも、より主節から独立した特徴を持つと言える。

第三章 時制解釈に基づく日本語連体修飾節の叙述タイプとドイツ語との対応

第三章では、日本語では関係節相当の連体修飾節構文で表現できる意味内容が、ドイツ語関係節では同等の意味解釈を得ることが難しい以下のような例を出発点に、主名詞に対する意味付与のあり方について日独語間で対照を行った。

(8) [化粧をしている]花子は女優のようだ。

(9) Hanako, [*die schön geschminkt ist*], sieht wie eine Schauspielerin aus.

Hanako REL beautifully made-up is looks like a actress AFF

(8)は、「化粧をしているときの花子は女優のように見える」という、修飾節が主名詞を時空間上で制限する解釈が可能であるのに対し、これを逐語訳したドイツ語の例文(9)は、「花子は今（またはいつも）化粧をしていて、女優のようである」という解釈が自然であり、日本語のように主名詞を時空間上で制限する読みは難しい。

本論では、まず日本語の非制限的連体修飾節構文において、どのようなときに(8)のような主名詞を時空間上で制限する読みが可能となるのかについて検証を行った。その結果、主節・修飾節共に、属性叙述である場合には、時間と共に変化し得る非内在的な属性叙述であること、事象叙述である場合には、その事象が特定の時点で起きた一回きりのものではなく、繰り返し起こる不特定なものとして解釈可能であることが、時空間上での制限読みが可能となるための必要条件であることが明らかとなった。

(10) (花子はよく痩せたり太ったりするが)痩せている花子は女優のようだ。

(11) Hanako, die schlank ist, sieht wie eine Schauspielerin aus.

Hanako REL slim is looks like a actress AFF

‘花子は(今)痩せていて、花子は女優のように見える。’

(12) Hanako sieht wie eine Schauspielerin aus, wenn sie schlank ist.

Hanako looks like a actress AFF when she slim is

‘痩せているとき、花子は女優のように見える。’

(13) おなかがすいている太郎は機嫌が悪い。

(14) Taro, der Hunger hat, geht es schlecht.

Taro REL hunger has goes it badly

‘太郎は(今)おなかがすいていて、機嫌が悪い。’

(15) Taro geht es schlecht, wenn er Hunger hat.

Taro goes it badly when he hunger has

‘おなかがすいているとき、太郎は機嫌が悪い。’

(10)の修飾節「痩せている」、主節「女優のようだ」は共に非内在的な属性叙述であり、構文全体として、修飾節が主名詞を時空間上で制限する読みが成立している。これを逐語訳したドイツ語(11)では、修飾節事態、主節事態はそれぞれ発話時現在の状態または恒常的な属性として解釈するのが自然であり、(10)と同等の解釈を得るためには(12)のような条件節で表すべきである。同様に、(13)は修飾節「おなかがすいている」、主節「機嫌が悪い」が共に繰り返し起こる不特定な事象として解釈可能なもので、構文全体として、修飾節が主名詞を時空間上で制限する読みが成立している。これを逐語訳したドイツ語(14)では、修飾節事態、主節事態はそれぞれ発話時現在の事象として解釈するのが自然であり、(13)と同等の解釈を得

るためには(15)のような条件節で表すべきである。

日本語の非制限的連体修飾節が、主名詞の指示対象を時空間上で制限する読みが可能となるのは、修飾節が特定の時点と結びつかない一般事態を表すものとして解釈可能な場合である。ドイツ語でも、関係詞が自由変項である制限的關係節、または分詞や形容詞による名詞修飾の場合には、修飾要素が一般事態を表すものとして解釈され、それ故主名詞を時空間上で制限する読みが可能となる。しかし非制限的關係節では、関係詞が指示的であることから、自由変項を含まない特定の事態を表すものとして解釈され、主名詞を時空間上で制限する読みができないのである。このことから、ドイツ語の非制限的關係節は常にそれ自体が独立した時制を持って時空間項を取るのに対し、日本語の非制限的連体修飾節は（絶対時制の場合にはドイツ語の非制限的關係節同様それ自体が時空間項をとることもできるが）独自の時制を持たず、主節の命題と結びついたうえで時制を取るという、より主節に従属した特徴を持つことが明らかとなった。またこのような日独語間での差異は、関係詞の有無という構文的な特徴に起因するものであると考えられることが示された。

第四章では、ドイツ語のいわゆる「**wie** 關係節」について議論した。**wie** 關係節とは、関係詞ではなく接続詞 **wie** によって導入され、節内の人称代名詞が主名詞を指示するという構造をもつ構文である。本論では、まず **wie** 關係節にも制限用法と非制限用法があることを指摘した。

(16) Ich wünsche mir eine Mütze, wie Hans sie gestern trug. (Heidolph, et al. 1981:833)

I wish REFL a hat WIE Hans it yesterday wore
‘私は昨日ハンスが被っていたような帽子が欲しい。’

(17) Einmal sah ich den Vater, wie er am Heizungskamin stand, ...

once saw I the father WIE he at-the fireplace stood
‘以前私は父が暖炉のところに立っているのを見て…’

(Uwe Timm, “Am Beispiel meines Bruders”, p.99)

(16)は、主名詞「帽子」が指示する対象を、**wie** 關係節が「ハンスが昨日被っていた帽子に類似するもの」に制限していることから、制限用法であると言える。一方(17)の主名詞「父」は特定の人物であり、**wie** 關係節によってその指示対象が制限されることはないので、非制限用法であると言える。

制限的 **wie** 關係節は、日本語のヨウナ節と同等の意味機能を持つ。制限的 **wie** 關係節とヨウナ節は共に、修飾節が表す集合 **X** を参照点とし、それに「類似するもの」を含む支配領域が設定されて、主名詞の指示するターゲットが検索されるという意味解釈プロセスを持つと考えられる。

また非制限的 **wie** 關係節には、「付帯状況」と「背景的な情報付加」の二つの用法があることを示した。(17)は「付帯状況」の例であり、これは時間副詞節を導く **wie** の機能と連続的に捉えられる。このような **wie** 關係節は、常に主節に後置され、後続の文脈と直接つなが

るという点で「継続的關係節」とも類似する特徴を持つ。一方「背景的な情報付加」を表す非制限的 wie 關係節とは(18)のようなものである。

(18) Der Impressionismus, wie er ihn von Liebermann und Cézanne kannte, ist sein
the impressionism WIE he it from Lieberman and Cézanne learned is his
Einstieg.

Approach

(Berliner Morgenpost, 03.07.1998)

‘Liebermann と Cézanne から学んだ印象派が彼のアプローチである。’

このような wie 關係節の表す内容は、主節の内容との意味的に密接に関わるものではなく、「挿入的關係節」に類似する特徴を持つと言える。

以上の観察及び考察から、日独両言語のいわゆる非制限的關係節にあたる構文について、ドイツ語ではより独立文に近い、主節に埋め込まれていない特徴を持ち得るのに対し、日本語では独自の時制を持たない、より主節に埋め込まれた特徴を持ち得ることが明らかとなった。両言語の当該構文の対応関係を図示すると図2のようになる。

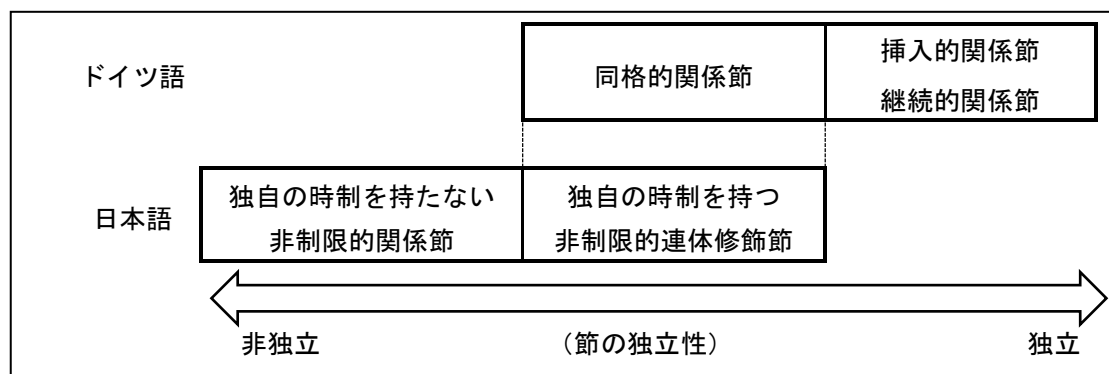


図2 ドイツ語の非制限的關係節と日本語の非制限的連体修飾節の対応

また、ドイツ語の非制限的關係節が「挿入的關係節」「継続的關係節」のような独立性の高い特徴を持ち得ること、日本語の非制限的關係節が、独自の時制を持たずに主節に依存した時制解釈がなされることは、主節と關係節の位置関係及び關係詞の指示性という構文的な特徴に起因するものであることを示した。

今後は、ドイツ語・日本語とそれぞれ類似する關係節構文を持つ言語についても、本論で指摘したのと同様の現象が見られるかを検証することで、本論の主張の妥当性を検証する必要があると考える。